

spiral®

Wacoal Art Center
5-6-23, Minami-Aoyama
Minatoku, Tokyo 107-0062, Japan
Tel.03-3498-1171 Fax.03-3498-7848

SPIRAL PRESS RELEASE
2005 年 3 月

「日本におけるドイツ2005/2006」参加プログラム

ビヨルン・メルフス展 「イースタン・ウェスタン・パーク」



[Eastern Western Park]

2005
2006
Deutschland
in Japan
日本における
ドイツ



世界が注目するドイツのビデオアーティストの日本初展覧会

2005年4月28日(木)～5月8日(日)
スパイラルガーデン(スパイラル1F)

主催／東京ドイツ文化センター、株式会社ワコールアートセンター

スパイラルは、2005年4月28日（木）～5月8日（日）まで、東京ドイツ文化センターとの共催でビヨルン・メルフス展「イースタン・ウェスタン・パーク」をスパイラルガーデンで開催します。

ビヨルン・メルフスは国際的に高い評価を受けているドイツのビデオアーティストで、ドイツ国内をはじめ、国外でも多くの賞を受賞しています。国際展への出展も多く、イスタンブール国際ビエンナーレ、ベニス国際ビエンナーレなどにも招聘されています。また、アメリカ最高峰の現代美術の収集で知られるホイットニー美術館ではアメリカのポップカルチャーをヨーロッパの視点から批判的に考察し、芸術作品として表現しているメルフスを高く評価し、彼の作品を紹介しています。

メルフスはテレビ番組のキャラクターやニュース映像、映画など、アメリカのポップカルチャーをモチーフとした作品を作り出しています。1966年生まれのメルフスはアメリカ発信のメディアを中心としたテレビ文化の中で成長した最初の世代に属しています。彼は子供の頃からメディアに接する現代、個人が現実の世界を認識し、アイデンティティを構築していく過程で、メディアに映し出されるバーチャルな現実が、どのような影響をもたらすのかを、作品を通して問いかけます。



女子高生？ 刀？ インディアン？

ビヨルン・メルフスが自ら登場する、奇妙でポップな映像世界。

本展覧会「イースタン・ウェスタン・パーク」は現代のメディア神話のあり様を、東洋と西洋、お互いの文化についてそれぞれが抱いている子供じみた想像をモチーフに表現する新作です。西洋においてゆがめられた東洋のイメージを、メルフス自身が日本の女子高生に扮することで体现する、インパクトある映像が作品の中心となります。繰り返し流れる街頭広告や映画の予告編、テレビ番組などのイメージから生まれる儀式のような動きや、グロテスクな子供の遊びが会場に映し出されます。彼は本作について「西洋でねつ造された東洋のイメージに、日本のメディア・カルチャーをサンプリングしたようなものになります。作品の中心になるのは日本ではどこにでもいて、繰り返し現れる女子高生というアイコンです。しかし私が扮する女子高生は、ネイティブ・アメリカンの儀式を奇妙な形で引用した風刺画のようなものなのです。」と語ります。

スパイラルガーデンのギャラリー壁面に投影される巨大なプロジェクション、エスプラナードへと続く階段部分に設置されるテレビモニター、そしてアトリウムに置かれたインディアン風テントのインスタレーションの3部からなる会場構成で、メルフスが生み出す映像世界の魅力を立体的に展開する大規模なインスタレーションです。

ビョルン・メルフス インタビュー

Q 新作「イースタン・ウェスタン・パーク」を作ろうと思ったきっかけは何ですか。

A ドイツにカール・マイ（1842～1912）という西部劇を書いた小説家があったのですが、彼は一度もアメリカ西部には行ったことがなく、写真を見ただけであとは想像で書いていました。子供のころ、私や同世代の子供たちは彼の小説をもとにしたテレビ番組を見て、アメリカ西部とはそういうところなんだ、と思いこんでいたのです。一方で、東洋に対して私が抱いているイメージもカール・マイが描いたアメリカ西部と同じぐらい、現実とはかけ離れたものです。「イースタン・ウェスタン・パーク」は西洋でねつ造された東洋のイメージに、日本のメディア・カルチャーをサンプリングしたようなものになります。作品の中心になるのは日本ではどこにでもいて、繰り返し現れる女子高生というアイコンです。しかし私が扮する女子高生は、ネイティブ・アメリカンの儀式を奇妙な形で引用した風刺画のようなものなのです。

Q 全体のコンセプトを教えてください。

A 私の作品の一部はとても個人的なメディア批評であり、マスメディアのすり込みの中でアイデンティティを探すという、私たちの世代に特有の社会現象を表しています。誇張されたキャラクターはマスメディアや大衆文化、大量生産によって作られたアイコンのコピーであり、永遠に終わらない子供時代を象徴しているのです。

Q あなた自身がいろいろな人に扮して映像に登場するのはなぜですか。

A どんなキャラクターでもすべて私自身が演ずることで、映像の中で彼らが立ち向かっている状況の違いを強調するためです。キャラクターはアーティストのエゴの表出ではなく、メッセージの担い手です。作品に登場する私の身体そのものがメディアとなるのです。ときにそのキャラクターは、メディアの中の人物と自分とを混同して分裂してしまった自我を現すこともあります。

Q 映画やテレビのトークショーなどの映像や音を引用することもありますね。

A 今やメディアの世界は「現実」と呼ばれているものと同じぐらい重要なものになっています。それは現実世界に影響を及ぼしていますし、映像や音を通じて「自分が何者か」を確かめる人もいます。私たちはメディアを通じて再現された世界に生きているのであり、また、再現されたものを通じて世界を認識しています。私たち自身が文化的な記号のサンプリングなのだと考えることもできるのです。



[Eastern Western Park]

新作

※以下過去作品（参考資料）



[AGAIN & AGAIN] 1998
video installation



[PRIMETIME] video installation 2001
(Kunstveren Hannover)



[AUTO CENTER DRIVE] 2003

Courtesy Galerie Anita Beckers Frankfurt



[THE ORAL THING] video 2001

＜展覧会概要＞

- タイトル： ビヨルン・メルフス展「イースタン・ウェスタン・パーク」
Bjørn Melhus 「EASTERN WESTERN PARK」
- 会 期： 2005 年 4 月 28 日(木)～5 月 8 日(日)会期中無休
 ※4 月 28 日 20:30 よりオープニングレセプションを開催します。
- 時間／料金： 11:00～20:00 無料
- 会 場： スパイラルガーデン（スパイラル1 階）
東京都港区南青山 5-6-23 〒107-0062
地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線「表参道」駅 B1 出口すぐ
- お問い合わせ： スパイラル tel. 03-3498-1171
- ホームページ： スパイラルウェブ <http://www.spiral.co.jp>
- 主 催： 東京ドイツ文化センター／株式会社ワコールアートセンター
- 協 力： シャープ株式会社
- 関 連 企 画： ビヨルン・メルフス展 京都会場：京都芸術センター
 4 つの異なるスペースで見るメルフス作品集
 2005 年 11 月 1 日～11 月 26 日

◆本展の広報に関するお問い合わせ・媒体掲載用写真のお貸し出し◆

スパイラル広報 宮崎佳代、伊藤俊子、渡邊モイチ

tel. 03-3498-5605 fax. 03-3498-7848

〒107-0062 東京都港区南青山 5-6-23

<ビヨルン・メルフス略歴>

1966 年	ドイツ・キルヒハイム生まれ
1985-87 年	シュツットガルトのアドルフ・ラッツィ写真オーディオヴィジュアル・スクール
1988-97 年	ブラウンシュヴァイク美術学校 (HBK) (映画とビデオを学ぶ)
1996 年	EMARE アーティスト・イン・レジデンス・プログラムにてブダペストに滞在
1997/98 年	DAAD ドイツ学術交流会奨学生としてカリフォルニア・インスティテューツ・オブ・アート (アメリカ・ロサンゼルス) に滞在
1998 年	K&S ファンデーション奨学金 (ブラウンシュヴァイク) を受ける ハノーバー・クンストフェルアイン賞を受賞 (スタジオ・レジデンス)
2001/02 年	ザクセン州科学学術文化省の奨励金をもとにニューヨーク・ISCP にアーティスト・イン・レジデンスで滞在 (インターナショナル・スタジオのキュレーター・プログラム)
2003 年	カッセル・ヴィジュアルアート芸術大学教授

受賞歴 (抜粋)

1992 年	ベルリン・ビデオアートフェスティヴァル・ヤングアーティスト奨励賞 マルル・ビデオ大賞・特別賞
1998 年	トランスメディアール賞 2 位 オスナーブリュック・ヨーロッパ・フィルム・フェスティヴァル・ドイツ批評家賞 マルル・ビデオ大賞
2001 年	ハノーバー・シュプレングル美術館賞
2003 年	第 49 回オーバーハウゼン短編映画国際ドイツ作品部門賞 VG ビルト・クンスト HAP グリースハーバー賞

国際展／グループ・ショー (抜粋)

1999 年	「Come in and find out」ベルリン・ポデヴィル 第 48 回ベニス国際ビエンナーレ 「ビデオ・ヴァーチャル—フォト・フィクショナル」ケルン・ルードヴィヒ美術館
2000 年	「DIVE IN」スイス・ルツェルン 「//fresh」オスナーブリュック・ヨーロッパ・フィルム・フェスティヴァル 「times are changing」クンストハレ・ブレーメン
2001 年	「On the Side of the Screen」 モスクワ・エキスポパーク・エキシビション・プロジェクト
2002 年	T.I.A (This Is America) ベルリン・メディアセンター ドクメンタ・サイドプログラム、カッセル 「ビデオドローム」 ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート、ニューヨーク 「momenta art」ブルックリン／ニューヨーク
2003 年	「ジ・アメリカン・エフェクト」ホイットニー・ミュージアム、ニューヨーク 第 8 回イスタンブール国際ビエンナーレ 「エゴのタクティック」ウィルヘルム・レームブルック美術館 「アメリカン・ドリーム」ロナルド・フェルトマン・ギャラリー、ニューヨーク 「視点の標本」ドイツ芸術展覧会ハレ、ボン 「人間について」シラー美術館／CC ギャラリー、ワイマール 「fast forward」ZKM メディアアート・ゲッツ・コレクション、カールスルーエ